

まちづくり

Vol. 224
(H26.9.17)

北海道開発局都市住宅課
まちづくり相談窓口

メールニュース

今号の記事

- 「恵庭まちづくりセミナー」が開催されます
- 寄稿「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014」

まちづくりに関して紹介したい地域の取組、配信アドレスの変更等については、まちづくり相談窓口(メールはこちら)まで

※配信希望は随時受け付けております。

各項目の○をクリックすると
各項目見出しに
ジャンプします

「恵庭まちづくりセミナー」が開催されます ～ “やりたいこと” がまちづくりになる～

北海道石狩振興局と恵庭市は、「恵庭まちづくりセミナー ～ “やりたいこと” がまちづくりになる～」を開催します。

このセミナーでは、(株)まちづくり五稜郭の青田氏から地域の活性化や課題解決に取り組む「まちづくり会社」の設立に至る道のりについての講演の他、各地でまちづくりに取り組んでいる方々を招き、「やりたいことをどのようにまちづくりにつなげているか」をテーマとした座談会が催されます。

「地域でやりたいことがあるけれど、何から始めたらいいのかわからない」

「恵庭をもっと楽しいまちにしたい…」 「まちづくりに参加してみたい…」 きっとヒントが見つかります。

- ・日時 平成26年9月19日(金) 18時30分～20時30分
- ・会場 恵庭市民会館 3階中ホール 恵庭市新町10番地(市役所隣)
- ・内容 講演 『五稜郭を何とかするために！～まちづくり五稜郭 設立秘話～』
株式会社まちづくり五稜郭 代表取締役 青田 基 氏
座談会 『想いを形にするために大切なこと』
【パネリスト】 株式会社まちづくり五稜郭 代表取締役 青田 基 氏
札幌オオドオリ大学 学長 猪熊 梨恵 氏
恵庭仕事おこしの会 会長 木内 克昌 氏
【コーディネーター】 札幌駅前通まちづくり株式会社 取締役・総務部長 白鳥 健志 氏

- ・定員 100名(入場無料、要事前申込)

※申込みについて、締切は9/17とされていますが、まだ若干の空席がありますので、申込み先(恵庭市 企画振興部 企画・広報課 (TEL 0123-33-3131 (内線 2342)))までお問い合わせください。

申込方法等の詳細は、[北海道石狩振興局 HP](#)をご覧ください。



(株)まちづくり五稜郭
代表取締役 青田 基 氏



恵庭仕事おこしの会
会長 木内 克昌 氏



札幌オオドオリ大学
学長 猪熊 梨恵 氏



札幌駅前通まちづくり(株)
取締役・総務部長 白鳥 健志 氏

寄稿「^{やま}そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014」

NPO 法人^{やま}炭鉱の記憶推進事業団 事務局長 酒井裕司

平成26年8月23日から10月13日の土・日曜日と祝日（10～17時）の19日間を会期に、空知地域に残る炭鉱遺産（三笠奔別、夕張清水沢、北炭送電線鉄塔の道）を会場として「そらち炭^{やま}の記憶アートプロジェクト2014」が開催されています。

主催は札幌市立大学、共催はNPO法人炭^{やま}の記憶推進事業団で、炭^{やま}跡地を舞台に、芸術という人間の英知が産業遺産の価値を輝かせ、地域の記憶を甦らせるとともに、地域の人々、来訪する人々が交流する新たな場の創造を目的としています。

1.（地域の歴史）栄華を誇った空知地域の炭^{やま}都市“炭都”

様々な炭^{やま}遺産が残る空知地域、その始まりは明治時代。北海道では「農業」と「地下資源の開採」を柱に本格的な開拓が始まりました。1879年、北海道初の近代炭^{やま}として官営幌内炭^{やま}（現在の三笠市幌内）が開^{やま}され、積出港である手宮（小樽市）まで日本で三番目の鉄道「幌内鉄道」が1882年全通。1906年には鉄道の国有化により財閥系、中小の炭^{やま}会社も空知地域へ進出、沢谷には巨大な石炭生産施設や積込施設等が整備され、急峻な谷間には長屋タイプの炭^{やま}住宅“炭住”が立ち並び、3交代での坑内作業は24時間“眠らない街”が形成。医療施設や教育施設、繁華街、映画館等の娯楽施設も有する“炭^{やま}都市”が山間に成長し、産出される“黒ダイヤ”石炭は、わが国の近代化を支えていきました。1960年代前半、空知地域には100を超える炭^{やま}が操業し、地域人口80万人のうち、50万人が炭^{やま}都市に暮らしていました。

2.（地域の現状）石炭産業の崩壊

エネルギー革命により1962年に原油輸入自由化、また安い輸入炭に押され、国内炭^{やま}は相次いで閉山に追い込まれ、空知地域においても1995年の空知炭^{やま}（歌志内市）を最後に、坑内掘りは姿を消しました。炭^{やま}の整理統合、そして閉山により、炭^{やま}都市は急激な人口減少・少子高齢化を招き、様々な地域活性化対策が講じられてきましたが、厳しい財政状況の中、困難な時代を経験してきました。2000年前後から各地域では足元に残る“炭^{やま}の記憶（施設跡以外の文化や風俗等も含む）”を資源として地域の方々が中心となった活動が徐々に広がり始めました。

各地に残る炭^{やま}施設跡は、旧産炭地域の特長な景観を形成し、市街地から望める巨大な立坑櫓やズリ山の存在は、ランドマークとして炭^{やま}の歴史を伝えてきました。閉山直後から「廃墟景観」の見物、写真撮影を目的での来訪はありましたが、近年は残された風景を手がかりに地域の歴史や近代化の痕跡を辿るツアーや地域の小・中学校が総合学習の場としても活用されています。



【市街地から立坑櫓を望む（住友奔別炭^{やま}跡）】

3.（取組の概況）「そらち炭^{やま}の記憶アートプロジェクト」とは

「炭^{やま}の記憶アートプロジェクト」は、単に美術展示を目的としたイベントではなく、空知旧産炭地域における“炭^{やま}の記憶”をキーワードとした地域再生のプロジェクトとして、アートの持つ力により、場の歴史、文脈を読み取り、未来に向けたメッセージを発信していく取組。

また展示・活動空間としての新たな機能、価値を見出すことも重要であり、さらに“炭^{やま}の記憶”が存在し続けるには、地域の意識・協力が最も重要な要素です。

アートプロジェクトを開催したきっかけのひとつは2003年、ドイツのレームブルック美術館館長であり、ドイツ最大の産炭地であったルール工業地帯の再生プロジェクト「IBA エムシャーパークプロジェクト」のキーパーソンのひとり、ブロックハウス博士から空知でのフィールドワーク、講演会を通じて、地域再生の大きな力として、ルール工業地帯の地域資源であった産業遺産を「アート空間」として再利用する視点を得たことです。



【幌内布引アートプロジェクト（2009）】

これまでに開催された5回の「炭鉱の記憶アートプロジェクト」概要は以下の通りです。

・2004年 赤平市「赤平炭鉱アートプロジェクト」

会期21日間、約500名の来訪。元炭鉱マンが中心となっていた地元組織の「歴史を保存・継承する市民会議」はその後「赤平コミュニティガイドクラブ“TANtan”」としてフットパス、立坑公開を行っています。

・2009年 三笠市「幌内布引アートプロジェクト」

北炭幌内炭鉱布引立坑跡を舞台とし、森林内の会場までは30分毎に車両によりアプローチするガイドツアースタイルでの公開、12日間に約600名が来訪。

・2011年 夕張市「夕張清水沢アートプロジェクト」

解体中の北炭清水沢火力発電所を舞台とし、近接するズリ山では展示とともに地域住民、学生、一般参加者による階段作りワークショップも開催。13日間の会期に約1,500名が来訪。

・2012年 三笠市「奔別アートプロジェクト」

旧住友奔別炭鉱貯炭積出ホッパーの取り壊し問題の中、所有者との協議により展示空間とし活用による保存、13日間に約2,000名が来訪。

・2013年 三笠市「奔別アートプロジェクト2013」

前年と同一会場にて開催。16日間で約2,500名が来訪。

各回の運営体制は、芸術監督に上遠野 敏氏（札幌市立大学教授）、全体の企画調整・管理をNPO法人炭鉱の記憶推進事業団が担い、公開時は学生やNPOスタッフ、会員など約30名が運営に関わっています。

展示形式は、インスタレーション（仮設展示）による期間限定で公開、会期終了後は撤収し元の炭鉱遺産としての風景に戻すことを基本としています。観覧は無料、写真撮影も許可、来館者からの発信もプロジェクトの大きな力となっています。

4.（取組内容）「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014」

これまでのアートプロジェクトでは、ひとつの地域を会場として開催してきましたが、今回は“点”から“線”へ、その舞台を広げ、広域的なプロジェクトとして開催されています。三笠、夕張の二つの拠点とそれらを繋ぐ送電線の道や旧駅舎が舞台となり、各会場では、町内会、住民、各自治体の協力・連携により、展示空間の整備、運営が行われています。

各会場の特長は次の通りです。

【三笠奔別会場】旧住友奔別炭鉱選炭施設内石炭積み出しホッパー及び周辺

1960年、立坑完成に合わせて延長された長さ100mの石炭積み出しホッパー、炭車の管理の物見台を舞台に4人の作家が炭鉱の記憶、近代化、産業的自然、エネルギー等をテーマに展示。幾春別連合町内会、童心会の協力による製作展示作業、ワークショップなどでは地域住民が協力、また公開日以外は巡回警備などの協力も頂いています。



【奔別会場の展示風景（2014）】

【夕張清水沢会場】旧北炭清水沢火力発電所・ズリ山、JR清水沢駅待合室

1926年完成、わが国有数と言われた北炭の火力発電所、1991年廃止後、解体が進められていましたが2011年の清水沢アートプロジェクト開催を機に解体停止中。今回は発電所、選炭施設、ズリ山と清水沢駅の待合室を舞台に海外作家作品も含む23の作品が展示されています。準備期間、公開日には炭鉱住宅に作家、学生等が滞在、2つの町内会の方々との交流が生まれています。



【夕張清水沢会場の様子（2014）】

【北炭送電線鉄塔の道】北炭送電線鉄塔および旧駅舎

清水沢火力発電所から送られた電気を南北100kmにわたり送電、北に延びる送電線網を支えた鉄塔の数力所に作品展示、また鉄路の記憶として、旧朝日駅、旧唐松駅にも作品が展示されています。



【夕張に残る送電線鉄塔 (2014)】

期間中は、札幌国際芸術祭連携事業による映画上映(8/24)、バスツアーのほか、岩見沢の駅前(そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター)より一日で全開場を観て回れる、有料シャトルバス(要予約:0126-24-9901)を運行しています。

5. (課題と効果) アートプロジェクトとまちづくり

炭鉱遺産でのプロジェクト開催は、資金確保や会場確保、会場として仮設インフラの整備とともに、炭鉱遺産を取り巻く課題も多い。それら課題を様々な人々、組織で超えていくことが将来に繋がる地域づくりへの蓄積となっていきます。



【そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014 弁別会場の全景】

主な課題は次のとおりです。

- ①失われていく炭鉱の記憶(自然的要因、社会的・経済的要因など)
- ②語り部、地元協力者の高齢化と担い手不足
- ③保存、活動運営を支える資金

本アートプロジェクトでは、多くの人々に炭鉱遺産、地域の現状を実際に見ることで、その価値を認識して頂き、「残すの賛成!」という応援者を増やしていくことが保存、活用につながると思っています。一般的な景勝地と異なり、その景観は荒々しく、廃墟・廃屋というだけの視点ではマイナスの景観構成要素と評価されることもありますが、地域、そしてわが国の近代化を支えてきた風景の痕跡として認識されていくことで“場の記憶”が伝えられていくのです。

また、地元の方々と協働することで、新たな語り部、担い手を生み、様々な地域資源を活用した活動へと醸成していくことも期待されます。プロジェクトにより、つながった大学やNPO、様々な人脈は、アートプロジェクトの枠を超えた地域らしい“まちづくり”へと発展していくことが可能であり、将来的には特長的な景観、産炭地域という限られた場での歴史性が「着地型、専門性の高い観光」や様々なコミュニティビジネスなど、これまでとは違った地域経済を形成していくことも重要と考えています。

現在開催中の「そらち炭^{やま}の記憶アートプロジェクト2014」の詳細は、[こちら](#)をご覧ください。どうか、NPO法人炭^{やま}の記憶推進事業団(0126-24-9901、10:30~17:30、月・火休館)へお問い合わせください。

寄稿者 NPO法人炭^{やま}の記憶推進事業団 事務局長 酒井裕司

※NPO法人炭^{やま}の記憶推進事業団が、昨年「都市景観大賞」【景観教育・普及啓発部門】で優秀賞受賞した際の活動紹介は、[まちづくりメールニュースvol.209](#)をご覧ください。